

米国におけるスキナー以後の行動分析学

Current state of behavior analysis after the Skinner in the United States

企画：小美野喬他（第33回年次大会実行委員会）

Takashi Omino et al.

(Meisei University)

Keywords: behavior analysis, after the Skinner, United States

司会：竹内 康二（明星大学）

Koji Takeuchi (Meisei University)

話題提供：清水 裕文（Invisible Hero, LLC）

Hirofumi Shimizu (Invisible Hero, LLC)

黒田 敏数（愛知文教大学）

Toshikazu Kuroda (Aichi Bunkyo University)

是村 由佳（株）コレムラ技研バラスト事業部／慶應義塾大学先導研究センター）

Yuka Koremura (ballast/Keio University)

企画趣旨：

素朴な問として、米国の心理学関連領域において行動分析学はスキナーの死後どのような位置づけになっているのか。米国に在住またはかつて在住して最前線で研究をしてきた方に、国際学会や学会誌からわかることだけではなく、現地で研究活動するなか肌で感じる行動分析学の現状についてお聞きしたいというのが企画の趣旨である。

日本行動分析学会が設立して30年以上が過ぎ、今年は学会の一般社団法人化や国際行動分析学会の開催など発展的な出来事がある一方で、基礎と応用の乖離および、機関紙の掲載論文数や学会発表数の伸び悩みといった課題もある。今後、行動分析学分野において研究を進めて行くにあたって、米国の事情を参考とすることで、我が国の行動分析学の今後の方向性が見えてくるかもしれない。

そこで、本シンポジウムでは米国の状況に詳しい3名の話者から、基礎領域から応用領域に渡って、米国における行動分析学の課題についてお話いただいた上で、日本の行動分析学領域に向けての提言をいただきたいと思います。

参集された方々からも積極的な情報提供をいただければ幸いです。

米国での研究・開発と行動分析（清水裕文）

まず、米国での仕事の探し方、必要なビザなど、自分が経験してきたこととお話しします。今後米国で活動したいという学生や研究者の方の参考になれば幸いです。

同時に、米国の研究者の活動がどういうものか、自分の経験を通してお話しします。研究・開発費の取得方法、これまでの傾向、これからの傾向などの話題を提供します。

最後に、行動分析全体の傾向を、また米国で行動分析を学んだ人が米国でどのような活動をしているかを、自分が知っている範囲内で時間が許す限りお話しします。事実をできるだけ正確に伝えるようにします。事実をもとに、それぞれの方が考察し、今後の可能性、方向性が見えてくれば幸いです。

行動分析学の社会的役割（黒田敏数）

かつてスキナーはアメリカで最も有名な心理学者の1人であった。彼は優れた哲学者であり、優れた研究者でもあったが、研究成果を学問だけに留めず社会に役立てようとしたことが彼の大きな功績だろう。スキナー以後、学問の面では対応法則をはじめとする数理論モデルの分野が飛躍的な発展を遂げた。しかしその一方で、研究成果を如何に社会へと役立てるのかという課題から目を逸らしてきた。

「基礎がなければ応用はできない」というのは間違いではない。しかし、基礎研究→応用研究という従来のモデルは、社会への貢献という観点からすると効率が非常に悪い。特定の社会問題を如何に解決するかは基礎研究者にこそ課されるべき課題であり又、応用研究者に課されるべき課題は別の領域への知識の応用である。対象が個人であれ集団であれ、「適切な場所・タイミングで特定の行動を発生させる」ことが、行動分析学者の社会的役割であることを提言したい。

行動分析学の実践の奨励（是村由佳）

スキナー以後、行動分析学の応用への展開はますます活発になり、行動分析学以外の様々な背景を持つ実践家も増加し、学術領域としての行動分析学に多様性をもたらした。

行動分析学と、さまざまな背景を持つ実践家をつなげる考え方として、Scientist-Practitionerモデルがある。このモデルの目的の一つは、実践家が研究や実践報告が可能になることである。米国の様々な種類の行動分析学会の大会やワークショップ、学術誌は、これをサポートする環境である。

一方で、他学領域を背景とする実践家の行動分析学へのコミットのはかたは多様であり、Scientist-Practitionerが成立しない場合もある。そのような場合には、行動分析学者が、実践家の多様な実践を積極的に奨励し、またサポートする姿勢を持つことを提言したい。